

江戸時代文人墓所の探訪

藤井直正

一、はしがき

今年から数えて、ちょうど十年前の昭和五十五年は、大手前女子学園にとって、まことに記念すべき年であった。学園創立三十五年という節目に当たるということに加え、この年の大きなできごととして、大手前女子大学の学長として日比野丈夫先生を迎え、また史学研究所が設置されたこと等を挙げることができる。

さらに、この時に当たって、現在、本学園の評議員に就任していただいている本多康彦氏から、ご所蔵になる古文書・典籍等の史料一切を史学研究所に寄託され、これについての研究を委嘱されることになった。本多家といえ、かの徳川四天王の一人であり、徳川家康のブレーンとして、幕府の創設期に大活躍をした本多忠勝を始祖とする譜代大名の一族である。そして、当の本多康彦氏は、八代將軍吉宗の治世に若年寄の要職に任じられ、また伊勢国神戸（かんべ）藩主であった本多忠統（ただむね）の後裔に当たるのである。本学に寄託された史料は、本多家の来歴と伊勢国神戸藩にかかわる古文書が主であるが、それらとは別に、江戸時代を代表する儒者、荻生徂徠の門下であり、いわゆる護園学派（けんたん）の一人でもあった猗蘭侯本多忠統の漢詩文集『猗蘭臺集』全二十巻をはじめとする典籍類がある。これらの史料は、藤井健造理事長の指示により、古文書については若林喜三郎教授（平成二年三月まで在職）が、また猗蘭侯と漢詩文については、中田勇次郎教授（平成元年三月まで在職）が、それぞれ研究を分担されることになった。

両教授による研究の進展につれて、昭和五十七年から六十三年にかけて、伊勢神戸藩の所在した現在の三重県鈴鹿市をはじめ、藩領のあった大阪府富田林市・河内長野市、さらに本家筋に当たる近江膳所藩が所在した、現在の滋賀県大津市等を歴訪して関連史料の調査が進められた。また、中田教授のご研究では、国立公文書館をたびたび訪れて関係史料の調査が進められて行ったが、これに並行して、猗蘭侯本多忠統の墓所はもとより、その師である荻生徂徠、また徂徠門下であり、猗蘭侯としては朋友であった服部南郭・安藤東野・太宰春臺・平野金華・越智雲夢といった人びと、すなわち護園学派文人の墓所を歴訪・掃苔した。

これら一連の調査・研究の成果のうち、近世文書については、全史料の翻刻に加えて、各史料に丁寧な解説を付けられ、近世大名としての本多家歴代の治績に歴史的評価を加えてまとめられた『伊勢神戸藩本多家史料』が、若林教授の手によって昭和六十三年三月に上梓された。また、中田教授による猗蘭侯と荻生徂徠・護園学派の人びととのつながりと、漢詩文による唱和応酬については、昭和五十五年より六十年まで、年を追って左に掲げる五編の論考として『大手前女子大学論集』に発表された。

本多猗蘭侯と荻生徂徠	大手前女子大学論集一六	昭和五七年
本多猗蘭侯と服部南郭	同	一七 昭和五八年
本多猗蘭侯と南郭、東野	同	一八 昭和五九年
本多猗蘭侯と越智雲夢	同	一九 昭和六〇年
本多猗蘭侯と守屋煥明	同	二〇 昭和六一年

*

ところで私は、両教授による前後十回に及ぶ調査に随行した。本来、私の用務は本多康彦氏とご相談しながら、両教授の調査の進行をはかり、調査を補佐する、いわばマネージャー的な役割であったが、そのかたわら、私自身の専門である考古学の見地から、また考古学プロパーとしての視点から、本多家及び伊勢神戸藩にかかわる遺跡・遺物を対象として、独自の調査・研究を進めさせていただいた。その成果は、若林教授のお奨めによって、前記『伊勢神戸藩本多家史料』の附編に、「本多家の遺蹟」として収録していただいた。

一方、中田教授の調査では、荻生徂徠を筆頭に服部南郭・安藤東野・太宰春臺等々と、徂徠門下、いわゆる護園学派の、いわば諍々たる

近世文人の墓所を歴訪し、各々の墓碑を掃苔したのである。これに随行する機を得た当初から、私は各墓碑の実測と拓本を採ることを期していた。この作業には、史学科研究室歴代の諸嬢、このために参加させた史学科学生の協力を得たが、幸いなことに、荻生徂徠以下、護園学派文人の墓碑銘の拓本が揃うことになった。これに要した労力は大へんなものであり、史学研究所に所蔵している各墓碑の拓本は貴重な資料といえるであろう。

この拓本は、中田教授の執筆された墓碑銘の紹介に役立ったが、中田教授のご論考では墓碑の形・大きさ等について本文中に記されているが、刻まれている銘文が主であって、墓所・墓碑についての説明が従であるのは止むを得ないとしても、写真も拓本も掲載されていない。従って、私たちの手で折角、苦労を重ねて手拓した拓本も、荻生徂徠墓碑を除いて公開する機会がなく、史学研究所に眠ったままになっている。

こうした経緯から、もうかなり時日が経ってはいるが、一連の調査・研究に参加した私としての責任から、また、私として独自の観点から、各墓碑の紹介をし、拓本そのものを公開したいと思い立ったのが本稿の契機である。

あまりにも数が多く、どのように集大成するかは今後に俟つとしても、本論集の前号に取り上げて来た近世大名の墓所、近世公家の墓所と並んで、今回取り上げたのは文人の墓所であるが、近世の墓制・墓所・墓碑を対象とする考古学的研究の一側面として評価していただければ幸である。

なお、徂徠門下各文人の伝記、業績と墓碑銘の釈文は、中田教授のくわしいご論考が発表されていることであり、ここでは触れない。従って、本稿では、墓所の所在と現状、及び墓碑の形状・法量等について、私自身の所見を記すことにし、墓碑に刻まれている銘文をその拓本とともに収録することにした。

二、墓所の探訪と所見

荻生徂徠とその門下、いわゆる護園学派文人諸氏の墓所を歴訪したのは、昭和五十七年から六十一年にかけての五年間であった。

江戸時代文人墓所の探訪

探訪することのできた文人は荻生徂徠をふくめて十三名、その所在地は主として東京都区内であるが、岐阜県大垣市・神奈川県鎌倉市にまで足をのびた。まず、その足跡を表にして掲げておく。ただし、本稿では東京都所在の墓所に限った。

護国学派文人の墓碑

	名 称	造 立 年 時	所 在 地	調 査 年 月 日
1	荻生徂徠墓碑	元文四年(一七三九)	東京都港区三田四丁目 長松寺	昭和五七年 七月
2	古賀精里墓碑	文政五年(一八二二)	〃 文京区大塚五丁目 大塚先儒墓所	〃 五七年 七月
3	服部南郭墓碑		〃 品川区北品川三丁目 東海寺	〃 五八年 七月
4	安藤東野墓碑		〃 台東区浅草橋場一丁目 福寿院	〃 五八年 七月
5	平野金華墓碑	享保七年(一七三二)	〃 文京区向ヶ丘二丁目 蓮光寺	〃 五八年 七月
6	太宰春臺墓碑	延享四年(一七四七)	〃 下谷区谷中坂町 天眼寺	〃 五八年 七月
7	越智雲夢墓碑	延享五年(一七四八)	〃 港区南麻布三丁目 天真寺	〃 五九年 七月
8	松崎白圭墓碑		〃 〃 〃	〃 五九年 七月
9	松崎観海墓碑		〃 〃 〃	〃 五九年 七月
10	本多忠如墓碑	安永一年(一七七三)	〃 文京区湯島三丁目 麟祥院	〃 五九年 七月
11	守屋煥明墓碑		岐阜県大垣市赤坂町 安楽寺	〃 六〇年一〇月
12	守屋東陽墓碑		〃 〃 〃	〃 六〇年一〇月
13	高野蘭亭墓碑		神奈川県鎌倉市 円覚寺	〃 六一年 七月

1 荻生徂徠墓所 東京都港区三田四丁目 長松寺境内

京浜第一国道の地下を走る京浜急行の「泉岳寺前」で下車し、道を西にとると、その突き当たりにあるのが四十七士の墓所で有名な泉岳寺である。門前から右へ、北方に向かって登る道が「伊皿子坂」、これを登りつめると、こんどは「魚藍坂」にさしかかる。長松寺は、魚藍坂下、桜田通りとの交叉点を少し北へ行った右がわにある。

『大日本寺院總覽』には、長松寺について次のように記されている。

浄、二十七、壽命山。東京市芝區三田豐岡町に在り、無量院と號し、荻生家の墳墓あるを以て知らる、芝増上寺の末なり。往昔は龍の口邊にありて、稱明院と稱せしと云ふ。開山は傳譽上人（天文十三年寂）にて、二世義公上人慶長十六年八丁堀に移して、大圓寺と改め、寛永十二年現地に移り萬治二年中興殘道上人入寂の時、其の法號を取りて今の名に改む。（中略）荻生家の墓域は、東方の崖際に設け、法眼荻生方庵（徂徠の生父）同徂徠・同金谷・同鳳鳴・同櫻水・同北溪・同青山・徂徠夫人佐藤氏等の墓碑十餘基を建てり。（後略）また、江戸神田の名主であつた齋藤幸雄、幸孝、幸成三代の著として天保七年（一八三六）に上梓された『江戸名所図会』巻之一には、徂徠先生の墓 三田寺町長松寺といへる浄家の境内にあり、碑文は猗蘭侯撰す。

と記してそのあとに碑文を載せ、

先生は荻生氏、本姓は物部、名は雙松、字は茂卿、字を以て行はる。一号は護園、通称は惣右衛門と云ふ。父は方庵と号して官医たり。先生父に従つて南総に住す。五歳にして文字を識る。十五歳よく文を属す。家極めて貧しく、東都に出て力学す。業成りて柳沢侯の挙ぐるに遇ひ、食禄五百石を賜はり、編修惣裁となる。享保十三年戊申正月十九日に卒す。著述の書八十余部といふ。

と注記している（鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会（二）』角川文庫より引用）。

その長松寺であるが、桜田通りから山門までは十メートルばかりの急坂、登り口の右横に石標が立ち、正面に、

史跡 荻生徂徠墓

背面にまわると、

昭和廿四年七月十三日指定 文部省

昭和四十八年五月十五日建 東京都教育委員会

と刻まれている。また、この石標と並んで、都教育委員会による説明板が立てられているが、その文面は写真で示した（図版一―3）。

これでわかるように、荻生徂徠墓は国の史跡に指定されているが、当初の指定は昭和二十四年であるから史跡名勝天然記念物保存法に準拠したものであり、文化財保護法による指定に更新されたようである。

門を入ると、右側に東面して庫裡と、鉄筋に改築された本堂がある。荻生家墓所はその奥にあるが、中央におかれている石製の香炉を囲むように方形の区画となり、現状では北面するもの三基、西面するもの四基、計七基の墓碑が並んでいる。徂徠の墓碑は、西面するもの四基のうち、向かって左から二つ目に位置している（図版二―3）。

『大日本寺院總覽』に記されている墓碑のうち、荻生方庵・同北溪・同青山の各墓碑は、ここには見当たらないが、土綏物、荻生家のご当主荻生敬一氏のご尊父である荻生傳之の墓碑が加わっているから、近代になって若干の移動があつたのかも知れない。この点については現在のところ未確認であるが、後考に備えたい。

さて、いよいよ荻生徂徠の墓碑についてであるが、方形三段の台座の上に立てられている。総高一八二センチを測り、碑身の高さ九五・五センチ、幅三七・〇センチ、奥行二六・〇センチである。正面には、

徂徠物先生之墓

の七文字が隷書体で大書されている。そして碑陰には、荻生徂徠門下の筆頭であり、伊勢神戸藩主・猗蘭侯本多忠統の撰文に成る碑銘が刻まれているが、各行の字数は二十二字で九行、ただし末行だけが十七字であるから計二一五字の銘文である。書は、中田教授によって、当

時有名な書家であつた松下烏石であると考証されている（図版二―1・2）。全文を次に掲げておく。

嗚呼大東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯

博窮物理立言脩辭德崇名垂不朽莫大焉嗚呼先生出

也如日之升也乃影之及無所不照其矇焉嗚呼實出先

生天意可知也其為人其行狀弟子識矣享保戊申正月

十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋洋鷺謨

世用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徽猷維享大業

已成日新富有暇其不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰

嘻我小信暇能孚神盛德不朽于牘民元文四年己未

秋七月門人朝散太夫藤忠統撰源君岳書

長松寺を訪れ、荻生徂徠先生の墓所に参詣したのは、昭和五十七年七月二十五日のことであつた。一行は、本多康彦氏をはじめとし、中田勇次郎、若林喜三郎の両教授と私、それに史学科研究室の中川（現姓、大谷）浩子さんと半田（現姓、新森）昌子さんといった顔触れである。前日の七月二十四日には、新宿区に在住の荻生家ご当主、荻生敬之氏のお宅に参上し、徂徠先生ゆかりの史料・遺墨等を拝見した。

墓所へは荻生敬之氏も同道下さり、揃つて墓所に参詣した後、すでに長松寺ご住職、荻生家の諒承をいただいている墓碑の拓本にとりかかった。この作業を手伝つてもらつたため木下 亘君（当時、国学院大学大学院在学中、現在奈良県立橿原考古学研究所勤務）に参加を要請し、大谷・半田両嬢の助力も得た。作業の途中から折悪く雨が降り始め、作業の続行が危まれたが、傘をさしかけてもらつて遂行、碑陽・碑陰二枚の拓本を採ることができた。中田教授がお書き下さっているように荻生徂徠先生の墓碑の拓本は、それほど手拓されているわけではないだろうから、史学研究所に収蔵されることになったこの拓本は、私たちの拙い手作業であっても貴重な資料といわなければならぬ。この二枚の拓本は、帰阪後すぐ藤井健造理事長にお見せしたが、早速表装に出して下さった。この時の記念写真をこの機会に掲げておくことにしたい（図版四）。

2 古賀精里墓所 東京都文京区大塚五丁目 大塚先儒墓所

文京区大塚には、徳川五代將軍綱吉の生母桂昌院の発願により、僧亮賢を開山として、天和元年（一六八一）に建立された真言宗の護国寺がある。古い建物としては、元禄十年（一六九七）建立の本堂をのこすのみであるが、江戸時代以来の風格を伝えている。

境内には、東京都の旧跡に指定されている開山の僧亮賢をはじめ、三條實美・山縣有明・大隈重信といった維新の元勳その他、有名人の墓が立ち並んでいる。さらに境内の東につづく広大な森は、明治五年（一八七二）に設定された豊島ヶ岡皇族墓地である。

古賀精里ら、計六十四基の墓を擁する「大塚先儒墓所」は、皇族墓地の東側の道を二〇〇メートルばかり北へ行ったところを左へ折れる路地の奥に所在している。うつそうと樹木がしげり、昼なお暗い幽境にさまよい込んだといったところで、現代にあつては訪れる人もなく、実のところ私達もこの場所を探し当てるのに難渋した。

この「大塚先儒墓所」は、徳川二代將軍秀忠と、兄弟である水戸藩祖徳川頼房の儒臣であつた人見道生が、寛文十年（一六七〇）に没したのを機会に、それまで道生の邸宅であつたこの地を、以後、幕府に仕えた儒学者を葬る墓所としたのがはじまりである。木下順庵・室鳩巢、寛政の三博士とよばれた柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里ら、名だたる儒学者とその一族の儒葬、すなわち儒教形式の墓所とされているが、埋葬のし方、まつり方の上でのことで、林立している墓碑そのものは通有の形式である。全体が国の史跡に指定されているが、これを知っている人は稀であろう。

ところで、この墓所に古賀精里の墓を訪れたのは、墓碑の碑銘が、伊勢神戸藩六代の本多忠升侯の撰文であり、忠升侯が古賀精里の門人であつたという由縁からである。

古賀精里について、身近にある『角川日本史辞典』を開いてみると、次のように解説されている。

古賀精里 一七五〇―一八一七（寛延三―文化一四）江戸中期の儒者。佐賀藩出身。名は撲、精里は号。はじめ福井小車・西依成斎に陽明学を学び、のち尾藤二洲・頼春水と交わり朱子学に転じ、佐賀弘道館・幕府昌平黌の教官として朱子学の振興に努力した。柴野栗山・尾藤とともに寛政の三博士と呼ばれる。

古賀精里の墓は、先儒墓所の中でも、ずっと奥まったところにあり、精里をはじめとし伺庵（精里の第三子、墓碑銘を書いている）・茶溪その他の一族の墓がまわりに並び立っている。一きわ大きいのが精里の墓で、二段の台石の上にのせられており、碑身の高さは一〇九センチ、幅四三センチ、奥行四三センチをはかる方柱状の堂々とした墓碑である。正面に、

精里古賀先生之墓

と大書し、左碑側に一行三十字で十二行、碑陰に同じく一行三十字で十二行、右碑側も同じく一行三十字で十二行、計三十六行、正確に数えると、一、〇五六字にわたる長文の碑文が刻まれている。中田勇次郎先生によると、欧陽詢の九成宮醴泉銘風の正式の楷書ということである。末尾の款記に、「文政五年二月、門人神戸城主藤原忠升撰」とあるのは、この碑文が先に記したように、伊勢神戸藩六代藩主本多忠升侯の撰文に成ることを明確にしている。その下に刻まれている「子焰書」とある焰は古賀精里の第三子で、その筆に成ることが知られるが昌平黌の教授であり、弘化四年（一八四七）六十才で没した。

樹叢に囲まれた墓所の中は、陽ざしがほとんどどかず、写真撮影は失敗した。折しも驟雨に見舞われ、傘をさしかけてもらい、散々苦労してようやく拓本を採ることができた。碑文は次の通りである。

注1 左側面の中央下方の部分に剝落があり四字は判読できないが、中田先生の揚げられている碑文によって補填した。

注2 本多忠升侯は、伊勢神戸藩本多家からいえば本家に当たる、近江膳所藩六代の康桓の子忠薫の四男であるが、養子として神戸藩主を継いだ。その康桓は神戸藩初代本多忠統の実子であるから、忠升侯は忠統侯の曾孫に当たることになる。

寛政三年（一七九一）生まれで、安政六年（一八五九）、六十九才で没した。藩主として在職したのは、享和三年（一八〇三）から天保十一年（一

八四〇の三十七年間である。

(左側面)

先生姓劉其先出於漢高祖靈帝之裔孫其實始歸化居甲斐數世至諱時連從筑後其子諱時宣家於州三瀨郡古賀村因民古賀文數世至諱時貞從肥前其子諱家時以武顯從龍造寺隆信戰死於島原其子諱時貞始仕鍋島氏後數世有諱安清者譜畝下可詳曾祖諱忠豐祖諱和作孝諱忠能咸仕佐賀毗牟田口儒人以寛延三年十月二十日生先生於佐嘉郡古賀邨先生諱撲字淳風稱彌助精里其孺幼少不凡日夕力學二親恐其因釀疾禁之及夜潛起入一室焚膏讀書不使二親知後侯命先生學於京師學成而歸寵眷極厚參與政議先生竭忠扶翼知無不言剏築學校先生乏之規制因命惡教授時國用弗給諸吏束手無策先生獻議刻明蠹幣終有以濟侯嘗命吏有罪者自首咸謂自首必免爭自首既皆褫其祿先生謂是罔之力爭弗聽遂辭其職明年乃聽仍命專掌教授民饑先生告以賑之士民悅服僅蓋敬重先生所言無弗聽賞賜無虐月杙是舉國從化文風大振人莫不稱先生賢亦侯賢以成之

(背面)

也寛政三年先生從侯東觀 幕府命先生說經於昌平學賞賜銀藩臣入學說經昉干先生人以為榮考致仕先生承家七年 幕府召先生衆知其為徵庸先生謂二親老矣晨昏不可闕欲辭以疾國老咸曰 幕府之命不可峻拒乃受命明年拉江戸擢為儒官賜祿二百苞命綜理學政賜月俸己陞教授增月俸班兩番上先是 幕府召柴野栗山尾藤約山二先生與先生皆為一時

之選三賢之名震於天下於是先生與林祭酒諸儒戮力振飭學政奉命纂輯孝義錄賞賜銀及時服文化七季命往對馬受韓裨有黃金時服之賜且以多年督學有功於加祿百苞明年接韓使於對馬韓人敬服其學德十年以奉職弗怠命得服布狩衣初先生應辟未幾命說經經筵屢獻文詩前後所資無算先生晚年齒德兩尊有山斗之望列侯執轡以見者數十人或詢以治道先生審揆時勢各答以其所宜皆得其要先生為人剛正寫欲人有不善直面戒之退無後言視綺麗麗紛華泊如也事親至孝與朋友信待子弟僕隸嚴而有恩喜

（右側面）

施鄉黨親戚之貧者毫不吝惜老命力學不衰尊信程朱如神明然深惡崎門固陋之弊故其學該博發為文詩雄偉富瞻滔滔如江河所著有詩文集二十卷學庸纂釋辨誤五卷書法精妙金石縑素膏沐天下兵法武技無不通習嗚呼如先生者非有道之士邪阿謂偉人矣配光增儒人先十三年卒後不再娶不畜姬妾生三男一女男長曰壽字溥卿次曰煒字晦卿次曰煜字季晬皆有賢名先生之入關也以親老不可移動留溥卿侍養回仕佐賀晦鄉前出後洪氏故以季晬為嗣女五皆嫁士族一未字而天先生以文化十四年五月三日卒壽六十八葬於都城西北大家之地遺命葬儀一遵儒禮不用浮屠法已翌季晬以升嘗為先生徒弟狀以乞銘升豈敢銘先生哉固辭不許因為之銘其辭曰赫赫漢祖帝王之雄遠孫一支實來我邦後出大儒名聲之隆蔽德蔽文後學攸宗弗銘已顯銘以欽風

文政五季二月 門人神戸城主藤原忠升撰 子煜書 石師廣羣鶴鐫

3 服部南郭墓所 東京都品川区北品川三丁目 東海寺境内

東海寺は、万松山と号し、徳川家光が沢庵宗彭そうほうを開山として、寛永年中に建立した臨済宗大徳寺派の禅寺である。もとは御殿山の南から目黒川に及ぶ広大な寺域をもっていたが、明治以後旧觀を失った。

『江戸名所図会』卷之二には、冒頭に、

万松山東海禅寺 品川北馬場にあり。花洛大徳寺派の禅宗江戸触頭の一員たり。当寺は輪番にして年々八月に交代す。寛永十五年戊寅、台命を奉じて沢庵和尚開創する所の禅園なり。（塔頭十七字あり。）

と記し、以下境内の仏堂、開山沢庵和尚の廟等について記し、三葉の絵を付して盛時の寺觀を活写している。そして、末尾は、

この寺は品川の勝区にして、門前の緑水は潺湲せんげんとして品川の流、海口に通ず。屋後おくごは青山崔嵬として、祇植の祠松間に聳ゆ。茂林脩竹、風帆沙鳥の勝覽、筆の反ぶ所にあらず。殊更方丈の林泉は小堀遠州侯の差図にして、庭作の規範とす。すべて満地青松、丹楓枝葉を交へ、晩秋の奇觀、錦繡を晒すが如し。常に寂々寥々として実に禅心をすましむるの一巨藍たり。

という名文で結んでいる。

東海寺には広大な面積にひろがる大山墓地があり、その一かくに服部南郭をはじめとする一族の墓所がある。すぐ下を東海道新幹線と東海道本線の軌道が通り、注意すると車窓から件の墓所を望むことができる。しかし、この軌道の敷設のため、墓所は二回も移転しているということがある。

服部南郭については、『角川日本史辞典』に次のように記されている。

服部南郭（一六八三―一七五七）

江戸中期の古文辞派の儒者、名は元喬、字は子遷。京都の人、柳沢吉保に仕える。荻生徂徠に古文辞学を学んだ。漢詩文にすぐれ、経学に通じた太宰春台とともに徂徠門の双璧といわれた。著書『南郭文集』『大東世語』『唐詩選』など。

先に掲げた『江戸名所図会』巻之一にも、

南郭先生の墓（同じ卯塔にありて一家の墳墓並び建てり。先生姓は服部氏、諱は元喬、字は子遷、俗称小右衛門。南郭はその号なり。その先、尾張津島七党の一にして、曾祖父某、越中国高島に渉る。父の諱を元矩といふ。京師に移る。母は山本氏なり。天和三年癸亥生る。歳十四、江戸に來りて徂徠先生に業を受け、後三年柳沢侯に仕ふ。後十八年致仕し、宝暦九年己卯夏六月廿一日卒す。寿七十七といふ。墓碑の銘文はここに略す。その碑陰に従四位源頼順撰、臣高元磧謹書とあり。）

と記され、図がのせられている（図版五）。

ところで、服部南郭の墓碑は、砂岩製、二段の台座の上に立ち、碑身の総高八五センチ、幅四三センチを測る。正面に、

南郭先生墓

と隷書体で大きく書かれているだけである。その向かって右に、碑身の高さ八〇センチ、幅三六センチの、これも、

南郭先生配井出氏墓

と刻した夫人の墓が並んで立っている（図版五）。さらに、前方左がわの一隅に、南郭の子の惟良・惟恭・元雄その他服部家一族の墓碑が並んでいる。中には立派な碑文をもつものがあるが、くわしい調査は果たしていない。

服部家には、先代の服部元文氏が作成された、『墓誌銘（稿）附墓碑配置図』と題した冊子が伝えられている。これを見ると、冒頭に「南郭服夫子墓誌銘」がのせられているのが服部南郭の墓誌銘であり、撰文は、従四位下侍従源頼順（水戸ノ御別レ大学頭也の注が付けられている）であったことが知られる。

服部南郭の墓碑は、先にも記した通り碑文が刻まれていないが、墓誌が埋納されていることがこれによってわかる。ただし墓碑そのものが改葬されているから現存しているかどうかはわからない。

『墓誌銘（稿）』には、以下、二代目貫元雄、南郭次子温卿維良、南郭三子愿卿維恭、四代小山元雅、四代元雅二子加藤元維、七代南梁元彰、七代元彰二子百助、八代南谷元彦の墓誌銘を収め、墓碑の配置図が付されている。東海寺墓地に現存する墓碑と対照する作業も一つの課題である。

4 安藤東野墓所 東京都台東区橋場一丁目 福寿院所管

福寿院は、隅田川畔に近い橋場一丁目にある曹洞宗の寺院で、『大日本寺院総覧』には、

東京市浅草区橋場町に在り、同地総泉寺に隸す。天正元年の創建にして、長島宇三郎を開基とし、嶺巖和尚を開山とす。寺門本堂共に南東に面す。堂後に儒者安藤東野の墓あり。服部南郭の文を鐫む。

とある。

安藤東野墓は、東京都の旧跡に指定されており、台東区教育委員会から刊行されている『台東区の歴史散歩、あさくさ篇』に、

保元寺の裏側、福聚院（橋場一ノ七ノ二）の前方に、安藤東野（一六八三―一七一九）墓（都旧跡）がある。墓は上部が欠けているが、最近石垣が築かれ、門標を建ち、顕彰への意気もみられる。東野は江戸中期の儒者、荻生徂徠門の俊秀で、柳沢吉保に仕え、五代將軍への進講にもあたった。

と記され、また最近第七版が台東区役所から刊行された、『下谷・浅草、新版史跡をたずねて』にも紹介されている。

現状では区画整理によって、福寿院の境内にあった墓地が寺とはなれ、安藤東野の墓所は、福寿院の門を出て、やや右に行った町角に囲まれた小さな区画の中にある。残存部の高さ約一メートル、上端の円い自然石が使用され、碑というよりも碯けつの形式を採っている。円い台石の上に墓標を立てているが、墓標の前面と左右の両面に輪廓を設け、正面の上部には篆書で「東野先生碯」の五字を横書きに刻んでいる（図版六）。碑文は、正面からはじまり、向かって左側と右側とで全文となるが、正面は八行で十八字、左側は八行で二十字、右側は七行で二十字を数え、全体で四四四字である。ただし、正面第一行のはじめ十四字と、左側は後二行、右側の七行はほとんど大半が欠失している。

碯の撰文は服部南郭の手に成り、『南郭文集』初編第八に全文がおさめられているので欠損部分はこれによって補うことができる。全文は次の通りである。

(正面)

(初徂徠物先生以今業創起東都也)人或猥以不誦未之能信其為名高來見者往々不達其意而悖師物先生乃謝曰即屢滿戶外何益也蓋數年而有滕東壁東辟下野人諱煥圖東壁字彌東野先生為學精敏有大志既冠乃歎曰丈夫生逢升平可復為介子博望乎詩書雖欠然庶幾哉幸而不朽雖筆研足矣遂諸侯不遇而會物先生為社及來見則大誦古文文益進

(左側面)

物先生亦叩兩端而厭其意稱若得一敵國時雖有周南縣生相與切劘而復古之學隆々日起矣亡何今諸公及元喬聞物先生善養才盍往歸之至則東壁既已入室雖諸公哉每稱說不啻辟三舍而東壁亦謙盅以先之由是文學之士彬彬々日益衆云東辟嘗謂余曰吾事物先生豈為耆艾年老而然哉顧乎(百年復見斯文東方)者非今日而何今世多稱物先生(生収才諸公亦由此益与)起者蓋以東壁為稱首也

(右側面)

(東壁善音律工書又通象胥家言凡所系譜)公誌

(伝具是矣享保己亥年三十七卒悲夫夫喬也)不

佞(昔生則各言爾志今乃銘之亦惟執友之義云

爾如其不朽有遺文矣是則東壁哉銘曰維時文籍

胎之下民胡而忽兮庶幾列星哉神也)

注、()内の文字は、『南郭文集』初編八所収の「東野先生碣」をもって補填した。

5 平野金華墓所 東京都文京区向ヶ丘二丁目 蓮光寺境内

蓮光寺は、地下鉄千代田線の「千駄木」^{せんだぎ}で下車し、ここから西方白山^{はくさん}に通じる団子坂を上り、駒込公園と駒込学園との間の道を少し北へ入ったところにある。金地山と号し、慶長六年（一六〇二）、大垣藩主であった戸田采女正氏^{うじかね}鋳が建てた寺で、もとは湯島にあったが、明暦の大火で罹災後この地に移転して来たということである。

平野金華の墓所は、本堂の西方にひろがる墓地の奥まった塀際に立ち、東京都の旧跡に指定されている。砂岩製、二段の台座の上に立ち、総高約一四〇センチ、墓碑の高さ八六センチ、幅三八・八センチ、厚さ二六・五センチを測る（図版九・一〇）。

正面に「文莊先生之墓」の七文字を篆書で大書し、碑の左側には一行二十七字で六行、碑陰は同じく二十七字で十行、右側はこれも同じく二十七字で六行、計二十二行、五九四字に及ぶ長文の碑銘が刻まれている（図版七・八）。墓碑銘の撰文は服部南郭で、『南郭文集』巻八に全文が掲載されている。

（正面） 文莊先生之墓

（左側面） 先生姓平諱玄中字子和奥人也因號金華早孤既冠族人謀令學醫

東都數年非其所志更為儒初從徂徠物先生問修辭物先生亦視一

隅己未 出其所為所未嘗聞如探諸 是時物先生方誘進英才乃

(背面)

大奇之顧謂喬等曰未嘗見進取如斯人古狂簡哉吾無所裁乃日夜益憤勵所著必機軸於已遂稱大著作云為人磊落好俶儻瑰瑋之事故其結撰每欲驚人又滑稽多端敖弄一世以故或見謂狂好奇然往

喜善疾惡視人善不啻自己若將加諸膝不置飲酒忼慨時或激烈至泣下一有惡聲及其所善搯擊欲反之甚於已私後乃稍稍折節然其義氣著於心本時發於感慨有似而非者蠹害君子乃曰彼何人斯爾居徒幾何嬉笑耳然亦微示其絕作文恒稱獨不見斗量乎人非不容而出之二參我即一斗亦用一石亦用不知其他卒後探其家素貧不藏一書所抄數卷已人始服其才量後為守山侯儒官年四十五卒享不容七年七月廿三日也葬東都城北蓮光寺配神田氏生三男二女長元幹字國禮女甫十二餘皆未薨沒先生貧甚而其所善者至擊鮮極驩未嘗以窶為辭每至令有急不得去其愛人亦出天性及卒知與不知皆為流涕既客死無親則姻家諸友爭義當葬遂立石守山世子

(右側面)

好學師重先生刪其稿行于世於是世子即諡文莊先生命 喬作碑
喬已為友二十餘年先生率不可人而推喬居一日長亦其義氣所

許乃爾皆謂如真兄弟至素服受吊遂不敢辭作銘曰

天假其文不假齒十載懍懍神不死神不死兮安其理先生之墓觀此

里享保壬子秋九月十一日

友人平安服元喬撰

江戸時代文人墓所の探訪

注1 戸田氏鏡が摂津尼崎藩主から美濃大垣に入封するのは、寛永十二年（一六三五）のことで、寺伝と合わないが、ここではそのままにしておく。

6 太宰春臺墓所 東京都台東区谷中四丁目 天眼寺境内

太宰春臺の墓所がある天眼寺は、山号を楞伽山といい、臨済宗妙心寺派に属している。JR山手線の「日暮里」駅の南にひろがる広大な谷中墓地を通り抜け、根津・弥生・本郷に通じる通りの一かくにある。

天眼寺については、『大日本寺院総覧』に、

東京市下谷區谷中坂町に在り、延寶六年の創建にて、松平下總守（武州忍城主）の菩提寺とす、松平忠弘（下總守）を開基とし、開山は南格和尚なり、太宰春臺・書家芳泉堂・梅邑晨の墓あり。（傍点筆者）とある。

墓所は本堂・庫裡の西がわにひろがる墓地のほぼ中央にあり、都の旧跡に指定されている。砂岩製、正面六一センチ、上部を山形に縮めた、高さ二八センチの台座の上に墓碑をのせている。墓碑の高さは九五センチ、幅四四・五センチ、奥行は三〇センチを測る（図版一三・一四）。

墓碑正面に「春臺太宰先生之墓」と隷書で刻まれ、碑の左側に一行三十二字で八行、碑陰には同じく一行三十二字で十二行、右側はこれも三十二字で四行の碑銘が刻まれていて、これを合計すると全部で二十四行、七六八字にわたる碑文である。末尾に「友人平安服元喬撰・東都葛辰書」と刻まれているから、服部南郭の撰文であり、書が「葛辰」すなわち松下烏石であることがわかる（図版一一・一二）。碑文の全文は、『南郭文集』四編卷八におさめられている。

(左側面)

太宰先生諱純字德夫號春臺物夫子嘗其考栢樹翁作墓碑載在集考以上具焉先生生于信陽飯田幼隨考東稍長仕出石侯數年疾乞骸骨三不許乃字去藩藩以輒去錮之西游京畿十年是時物夫子唱復古學于東都滕東壁縣次公相助修業而次公西歸東辟乃願夫子之門從游日多然跡傑可與適夫子道者猶未至東野幼嘗已同先生受書協謙野先生者服其敏學曰思先生數書招之會錮亦解先生遂東至則見物夫子說其學以為得歸乃事夫子與東辟二三子講習古學博文約禮敗尚經典物夫子沒益詳究先王之道孔氏之書簪為大師弟子諸侯大夫至草野士日益進先生既勵己行以亘方自居從游之徒莫不奉名教唯謹爾畏

(背面)

如太府前後所見諸侯其多未嘗枉己而求見焉進退必以禮案貧樂道終不復仕然其志則曰儒者之學折中孔子孔子歷祖述先王斥聖政治之道具存焉用之則行如有用我者何以哉故又未嘗忘經世之用故沼田侯好學受賢禮遇先生先生亦深相得焉侯在政府嘗從容語侯曰方今遭不諱之朝然時制所閱無路居下上疏陳事純雖微賤幸因侯而若得言一二得失或又觸聞以賤人妄犯上被嚴刑萬一以身有補於濟衆衆忠所願己不識可否侯曰試乃可也遂上封事不報然世已異其特立而益敬仰其非記聞浮華之學先生幼受孝經論語於太翁及學成益尊尚焉漢孔氏傳古文學經久亡彼方而獨存吾邦因校訂諸博士家所傳作音注而刊之復因沼田侯獻諸朝政府諸公聞之爭求於侯侯為並貽焉又本師說更加所見作論語古訓及外傳又作家語增注以為此三者庶見孔氏遺則故用意特勤焉先生強記且於事精詳其考究書籍一字不苟過必歸正然後止他所著書凡

數十亦皆學者傳尚焉書題併平日規行門人稻垣長章為誌松崎惟時狀行詳于

(右側面)

二文延享丁卯五月晦逝年六十八葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆初娶末松氏無子再娶前川氏亦無子子養阿武家之子名定保元喬以同盟相識三十餘年乃顧夙昔物夫子與二三子已先逝矣復不慙遺先生哀哉因作銘曰
學之道師嚴然後道導先生之敬教成人學立道存

友人平安服元喬撰

東島葛辰書

孝子 定保立

7 越智雲夢墓所 東京都港区南麻布三丁目 天真寺境内

越智雲夢墓所のある天真寺は、港区立運動公園のすぐ南にある。『大日本寺院總覽』に、

東京市麻布区本村町に在り、寛永元年仙溪和尚の開山に係る。福岡黒田家の香華院とす。

と記されているが、臨済宗大徳寺派の寺院であり、仏陀山と号している。本堂・庫裡のうしろに広い墓苑があり、その片隅に越智雲夢の墓所があり、それと並んで松崎白圭と松崎観海の墓所がある（図版一六）。ともに徂徠派の学者であった。

越智雲夢墓碑は、砂岩製、碑身の高さ九六センチ、幅四二・四センチ、奥行三〇・四センチを測る。正面に「法眼雪翁正珪」と一行に隸書体で題し、左側に一行三十二字で六行、碑陰には二十一字で八行、右側にこれも二十一字で六行、計二十行、四二〇字にわたる碑文が刻まれている（図版一五・一六）。末尾に「延享五年五月平安服元喬撰孝子正山立」と刻まれている、碑文の撰がこれも服部南郭であり、延享五年（一七四八）に建てられたことが知られる。もちろん碑文の全文は、『南郭文集』四編巻八におさめられている。

（左側面） 故法眼雲夢越公諱正珪字君瑞今歲延享戊辰三月

廿五日卒其考平菴先生塋於麻布天真寺於是即葬

鳥公以貞享三年丙寅正月生享保九年甲辰嗣家十

五年庚戌叙法眼寛保三年癸亥謝病致仕號雪翁乃

至今歲享年六十三配村井氏男二人長正白字長庚

早卒次正山字叔嶽實既嗣家承祿孫男女今己二人

(背面)

皆叔嶽子也元喬交公于社盟三十余年以相識殊深
嘗誌平庵先生墓既受其譜牒世紀家序爵祿具焉又
序公集槩他文辭交會道其為人數焉乃顧前時公之
克家守業貞矣公之尚古愛文固矣亦皆所謂謹厚純
懿耽學篤專喬汗不至阿所好唯公之厚德必乎多福
而方踰中壽乃以終乎嗚呼斯為憾矣且往護社之方
盛也直諒多聞一時相輔不下數十輩至於謂喬也足
以心交相與者獨公及故平文莊數人而已文莊逝已

(右側面)

十數年今復失公於喬哀莫傷焉雖然天不可知也公
之福未盈詒厥燕翼其在後嗣乎且今叔嶽申好舊要
不渝則雖白公不沒可也襄事竣矣刊石之役喬不敢
辭乃附哀憾之辭重以墓銘銘曰交道莫貴於知心非
文誰知其所知生交公以斯路沒報公以斯辭延享五
年五月平安服元喬撰孝子正山立

10 本多忠如墓所^{ただゆき} 東京都文京区湯島三丁目 麟祥院境内

麟祥院^{りんしょういん}といえ、昨年のNHKの大河ドラマで全国の人びとに親しまれた、美濃国の武将斎藤利三の娘で、稲葉家に嫁した、お福こと春日局の墓所のあることで知られている。不忍池^{しのばすのいけ}畔から本郷三丁目に通じる、その名も春日局に由来する春日通りに面して建つ、臨済宗妙心寺派の寺院である(図版二〇一三)。

『大日本寺院総覧』には、この麟祥院について次のように記している。

天澤山。東京市本郷区龍岡町に在り、臨済宗江戸四箇所の一にして、俗に枳穀寺と稱す。舊時は境内七千七百六十三坪を有し、朱印三百石を領し、寺格は登城乗輿獨禮地たり。寛永元年徳川家光乳母春日局(麟祥院)の請に因り、境内除地一萬坪及び徳川秀忠の御明御殿を賜ひて建立せしめたるもの。開山は本寂定光禪師とす。初め報恩山天澤寺と稱せしが、將軍家光の命にて今の寺稱に改むと云ふ。慶安二年九月、局の七回忌に當り、稻葉正則(淀)堀田正盛(佐倉)等、局の兒孫たるに依り、幕府に願ひて本寺管理の任に當り、依て兩家を開基とす。

門を入ると庫裡と本堂が東西に並んでいるが、本堂の西側に広い墓地があり、そのほぼ中央に一きわ目立つのが、ここに取り上げる本多忠如の墓所である。春日局墓所は、この前を通り越して、墓地のずつと奥まったところ、婚家稲葉家墓所の一かくにある。

本多忠如は、碑文中にも系譜が刻まれているが、『寛政重修諸家譜』をみると、

忠如 時之助 讃岐守 越中守 従五位下 致仕號 實は忠直が五男。母は稻垣氏。正徳二年生る。享保六年七月忠通が終にのぞみて養子となり、閏七月二十三日遺領を継。時^(吉宗)に二十八日父が遺物延寿の刀を献ず。十一年八月二十八日はじめて有徳院殿にまみえたてまつ

り、十二月十六日従五位讃岐守に叙任す。十三年十月六日越中守にあらたむ。十六年六月十三日はじめて封地にゆくのをたまふ。元文三年正月八日家蔵するところの裏祖忠勝が地鉄おろしの刀及び根箭等、本多中務大輔忠良をもて台覧に備ふ。延享三年九月二十五日相良を転じて陸奥国菊多郡泉にうつさる。宝暦四年八月二十九日致仕す。安永二年十月二十四日卒す。年六十二。冲翁玄宣、葆真院と号す。湯嶋の麟祥院に葬る。室は松浦肥前守篤信が女。

と記されている（傍点筆者）。

幕末で十二を数えた本多家諸藩の一つ陸奥国泉藩は菊多郡に属し、現在でいうと福島県いわき市泉町に館があった。寛永十一年（一六三四）磐城平藩から分封されて成立し、以後内藤氏三代・板倉氏二代・本多氏七代とつづいた。本多氏としては、忠如が遠江国相良（現在の静岡県榛原郡相良町）から一万五千石で入封したのがはじまりで、よく民政につとめ、寛政の改革に際して、老中松平定信に抜擢されて寛政二年（一七九〇）に老中となった忠籌は、壺山侯本多忠如の長子である。この年、忠籌は、武蔵・上野で五千石を加増されて二万石となり、以後明治に及んだが、明治元年（一八六八）に減封されて一万八千石となった。

本多忠如の墓所は、一辺二メートルに近い方形の基礎を備え、さらに二段の台座の上に碑身をのせた、総高二・一五メートルを測る堂々とした墓碑で、碑身の高さは一・一五メートル、一辺三八センチ、上部を台形にした方柱形を呈している（図版一九・二〇）。

碑身は西を正面にし、「壺山老矣藤公之墓」の七文字を篆書体で大書し、左側から碑陰、さらに右側に回って、計三十行、全体で七三四字にわたる長文の碑銘が刻まれている（図版一七・一八）。撰文は泉藩士であった宮田明、書は「南勢華岡 滕益道」とあるから、伊勢国の人であることはわかるが、「華岡」の地名は未詳である。

(左側面)

本多氏之有勲勞于開國也史籍載焉世人傳焉以故候善國據名城其季年十四扈從

神祖于浪華之役自獲首級後封遠懸河侯三益封涉奧白河老而致仕長子襲封且請分封三子其一我廣照公也白河侯後徙毛宇都又徙和郡山傳泰讓遷妙二公而至玉巖公早世年僅成童法不得有嗣

國家特賜封內之地五萬石立其弟桂岳公為郡山侯明年又天國遂除並葬于湯島麟祥院於公為兄為弟公深傷宗室絕祝嘗上墳墓嘆曰嗚呼命也夫二公沒而無後今且五十年知二公而衰者日遠一日寥寥亡幾又歷數十歲即將亡其人雖有一二庶封在豈如有後死則我欲葬焉為二公守兆域我葬在焉為我後者以歲時謁則二墳亦庶不蕪穢我幾六十人生朝不謀名我於

(背面)

生存之日而成斯事我心則安若或罪我以不奉先隴我則甘受其責耳老命造壽藏於二公墓側因使臣明記其所由云公名忠如字子璋壺山其號老稱冲翁遷妙公之第十二子也正德甲午九月十八日生于東都邸母稻垣氏初遷妙公為我故相良世子泰讓公無子養以為嗣我相良侯以適孫桂光公為後乃公之兄享保辛丑捐館無子以公為嗣襲封相良侯享保丙午叙朝散大夫延享丙寅徙奧泉邑奉

命一護

日光大祭三衛戌浪華城夫人松浦氏平戸侯之女生男女各一有疾出男乃今侯女嫁山口世子先卒側室生二男三女其四天季女尚幼公

歲識字自肅姓名傍及佗人長而好學師事春臺東野二先生善

(右側面)

性儉素且多病不求榮達不喜奢靡供游暇則凭几讀書瀟酒聞雅風流自處
中年患痔不便騎乘寶曆甲戌秋請而老焉今侯嗣立乃營菟裘於叡麓之莊
謝客聞居所樂詩與書畫優游卒歲所箸千秋館稿巢雲閣集為卷若干詩數
千百首東里先生曰其精絕無愧開天諸作者下者亦足以走後生矣公為詩
嚴守法律一字不苟必精必密刻意其勤是以宮商協度意象衡當見稱識者
益祖先皆以武顯世文公其始哉

安永二年仲春

奥州泉藩 宮田明記

南勢華岡 勝益道書

公以安永二年癸巳十月十五日終享年六十繹謚曰葆真院沖翁玄冥大居士

三、小 結

すでに、はしがきに記したように、昭和五十七年から六十一年までの五年間にわたり、本多家史料調査の一環として、江戸時代の儒者荻生徂徠門下の、いわゆる護國学派文人諸氏の墓所を歴訪した。

各文人墓所のところで述べた通り、荻生徂徠墓所と古賀精里墓所のある大塚先儒墓所は国の史跡に、また徂徠門下の各文人墓所は、東京都の旧跡にそれぞれ指定されている。このことは、これらの人びとの業績が、江戸時代の文化、とくに儒学を中心とする思想、あるいは漢詩文等の分野においてすぐれていたということを端的に物語っているのである。

さらに、これら文人諸氏の墓碑に刻まれている碑文は、門下あるいは友人の撰文に成るものであり、ここに取り上げたものでは、当時名だたる漢詩人・漢文学者であった服部南郭の撰文がもつとも多い。また、これを筆に託した書家も、松下烏石をはじめとする著名な書家であったことが知られる。従って、ここに紹介した墓碑そのものが、文筆を凝縮した作品ということができるのである。

こうした意味から、私たちが探訪し掃苔した墓碑の拓本を、そのままの形で紹介したいという気持を以後ずっと持ちつづけて来た。決して十分とは言えないが、今回ようやくそれを実行することができ、私としては責任を果たしたというか、溜飲のさがった思いである。

こうした機縁をつくっていただき、調査・研究に参加させていただくことができた私はまことに幸運であったが、藤井健造理事長と本多康彦氏にまずもって感謝の意を表したい。荻生敬之・服部元義の両氏には、自由な調査を承認して下さいと共に種々のご教示をいただいた。また、中田勇次郎先生には、調査に随行するたびに薫陶を受け、『大手前女子大学論集』の旧号にのせられたご論考からは多くのことを学び、本稿を記すに当たっては存分に利用させていただいた。ご退職後、お会いする機会を得ていないが、ご健勝を心からお祈りする次第である。

本文中にも記したが、この調査と作業には、史学科研究室歴代、中でも十一期生の藤本（旧姓、中瀬）史子さん、十三期生の大谷（旧姓、中川）浩子・同 新森（旧姓、半田）昌子さん、現在も在職してくれている十四期生の額田由美子さんの助力は多大であった。また、実測図・拓本のコピー・トレースには、考古資料室の松本有加子さん、及び藤井文子の協力を得た。共に記して感謝の意を表する。